

## ヤギの放牧による緑地（里山）再生（2014年度中間報告）

### ■ 研究目的：

美濃加茂市北部（平成記念公園）の未利用地（竹林伐採後の緑地）にヤギを放牧することで、帰化雑草の除去およびタケの再生を抑制し、緑地（里山）の再生を目指す。本年は放牧2年目にあたる。放牧を経年的に継続することで、草量および植物種の構成に影響があるか、またヤギを継続的に飼養可能かどうかを検証する。

### ■ 研究方法：

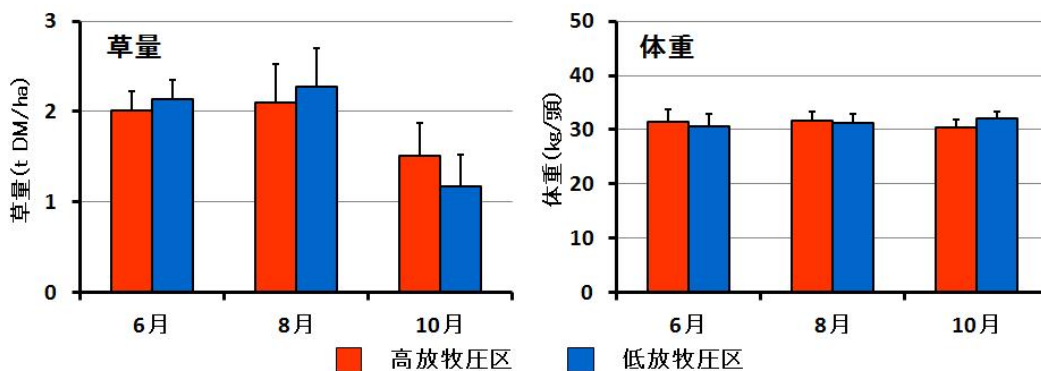
平成記念公園にある竹林伐採後の未利用地 0.8 ha を牧柵で 2 区に区切った。一方の区は、単位面積当たりのヤギの放牧頭数を 14 頭/ha（低放牧圧区）とし、他方は 26 頭/ha（高放牧圧区）として、5 月から 11 月まで放牧を行った。各区において草量、植物種の構成およびヤギの栄養と健康に関する項目を 6 月、8 月、10 月において調査した。

### ■ 結果：

草量は、植物の成長が旺盛な春から夏にかけては、1 ha 当たり乾物（DM）で 2 t 程度を維持した。植物の成長が低下する秋（10 月）には、草量は高放牧圧区でおよそ 1.5 t DM/ha、低放牧圧区ではおよそ 1.2 t DM/ha まで低下した。放牧頭数が少ない低放牧圧区の方が、草量の低下が大きかったのは、各区を構成する植物種の違いが影響したものと考えられる。

放牧したヤギの体重は、草量の変化にも関わらず、いずれの放牧圧でも 1 頭当たりおよそ 30 kg を維持した。このことから、竹林伐採後の緑地において放牧を 2 年継続して行っても、本研究の放牧圧ならばヤギの飼育は十分に可能であると考えられる。

放牧圧の違いが、植物種の構成および多様性、ヤギの栄養状態の詳細にどのような影響を及ぼしたかについては現在分析中であり、後日報告する。



5月: 放牧開始直後の風景

タケの若芽を食べるヤギ

9月の放牧風景